

インターアクション仮説をめぐる一考察 一言語習得の可能性の観点から

A Study of Interaction Hypothesis.
-From the Perspective of the Possibility of Language Acquisition-

藤田裕一郎

要旨

本稿では、Long (1981, 1985, 1996) が主張するインターアクション仮説、及び新インターアクション仮説をもとに、自然な会話の中で、話者は Break Down (言語的挫折：以下 BD とする) からどのように回復するか、どのような言語的調整を行っているか、また、意味交渉以外の言語習得の可能性を探った。

調査には日本語母語者 1 名と外国人 1 名に自然な会話をしてもらい、その中で起こる BD、及び BD からの回復について分析した。

その結果、Long が主張するように、インターアクション中の BD による会話的調整が行われていた。しかし、BD から回復するための会話的調整は認知的な面から考えると、学習者にとって認知負担が大きいため、有効な場合とそうでない場合がある可能性があること。Non-Native Speaker が言いたいことを Native Speaker が先取りすることも言語習得を促進する可能性があることが示唆された。

キーワード インターアクション仮説 意味交渉 言語的調整 先取り

1. はじめに

Long (1981, 1985, 1996) が主張するインターアクション仮説、及び新インターアクション仮説は言語習得に根幹を示すものであるが、賛否もある。そこで本稿は、Long のインターアクション仮説をもとに言語習得の可能性を再検証し、その可能性を探る。

2. 先行研究

インターアクション仮説とは、インターアクションの中で Break Down (以下、BD とする) が生じた際に、それを修正しようとする意味交渉が言語習得を促進するとするものである

(Long, 1981)。Long は、インプットが理解可能になる会話的調整の特徴を見だし、それらの要素がお互いの伝達内容の理解を深める意味交渉を促進し、習得につながると述べている。そして、会話的調整には、学習者が理解したかどうかを確かめる理解チェック (comprehension check)、意味不明の発話に対して学習者に説明を求める明確化要求 (clarification request) や、リピート (repetition)、言い換え (paraphrases) があるとする。

Long (1985) は、クラッシュのインプット仮説の検証ができないとの批判から、インターアクション仮説を証明するために、(1) 会話調整がインプットの理解を促進していることを示す。(2) インプットの理解が習得を促進していることを示す。(3) 会話調整が習得を促進することを示す、という3つのステップを示した。そして、これに基づき、様々な研究が行われた。例えば、Pica, Young, and Doughty (1987) は、(1) 母語話者同士を想定した発話、(2) 非母語話者に向けて簡略化した発話、(3) 非母語話者に向けて簡略化した発話に対して学習者はインプットが理解できない場合に交渉の機会が与えられる会話を比較した。その結果、(3) (2)

(1) の順に理解がよかったと報告している。その他、双方向型の収束タスクが多く意味交渉を引き起こすこと (Pica, Kanagy & Falodum, 1993)。簡略されたインプットよりも、インターアクションを通して調整されたインプットのほうが、学習者はよく理解できること (Gass & Varonis, 1994) などがわかっている。

一方で、インターアクション仮説を不支持する結果も出ている。Pica (1991) は、Pica, Young, and Doughty (1987) の3条件のインプット所要時間を一定にして検証した結果、どれも有意差はなかったこと。会話調整をすると、学習者は言語能力を向上させる必要がなくなるので、習得に否定的な効果を及ぼすのではないかと報告している。この他、学習者はよく分かっていないのに「はい」とうなずくため、検証結果の信頼性が疑わしいこと (Hawkins, 1985)。インターアクションの中で起こる確認チェックは、話題の持続か、会話調整の要求なのかあいまいであること。理解可能なインプットがどのように習得に結び付くのか説明がないこと

(Aston, 1986; Cameron & Epling, 1989) などの意見もある。

そこで、Long (1996) は交渉の役割は形式に注意を向けることを促進することだとする新インターアクション仮説を提唱した。新インターアクション仮説では、アウトプットや認知過程も考慮に入れ、インプットにおける言語形式に気づくこと。気づける形式は学習者にとって処理可能な状態であること。つまり、肯定証拠を提供すること。また、否定証拠の提供と修正アウトプットも習得に寄与するとしている。また、新インターアクション仮説は、フォーカス・オン・フォームという概念を含む。フォーカスオンフォームは認知的な出来事の中で学習者の注意を一時的に、または同時に向けさせる教育的アプローチである。

新インターアクション仮説の批判として、シングル・タイプのインターアクションしか対象にしていないこと。意味交渉以外のインターアクションを対象にしていないこと。中級レベルには効果的かもしれないが、インターアクションができない初級や意見交換に重きを置く上級でも効果があるのか分からないこと。語彙やシンタクスが中心とされるが、屈折形態素などにも効果があるのか検証されていないこと。子どもや大人などどのような対象者にも同じような効果が望めるのか分からないことなどが挙げられる。

以上のように、インターアクションが言語習得を促進するとしたインターアクション仮説及び、新インターアクション仮説には賛否があり、インターアクションにおける会話調整が言語習得を促進するのか証明されていない。また、研究の中心は教室活動や実験研究で、自然会話の中で会話的調整がどのように言語習得を促進しているのか、認知的側面から言語習得促進の可能性はあるのかわかっていない部分もある。

3. 本研究の目的

本稿では、自然会話の中でBDが起こった際にどのようにBDから回復し、それが言語習得を促進する可能性があるのか、事例ごとに観察して記述・考察すること。また、BDからの回復以外の言語習得の可能性について探ることを目的とする。

4. 調査

調査は母語話者（以下NS）1名と非母語話者（以下NNS）1名の自然会話を対象とした。NSは30代で、外国人との接触は海外旅行時にある程度である。彼に調査への参加を依頼した理由は、日本語教師のように学習者の日本語レベルに応じてフォリナー・トークを適切に使分けたり、意思疎通のために様々なストラテジーを持っていたりする場合、インターアクション中のBDが少なくなる可能性があり、外国人とのコミュニケーションにあまり慣れていないほうがBDがよく起こると考えたのが大きな理由である。

一方、NNSは日本語レベルが初級後半程度のベトナム人留学生で、来日4か月である。両参加者には特に調査の目的を伝えず、好きなことを1時間程度話してくださいと伝えた。

調査はホテルの落ち着いた喫茶店で、筆者が参与しながら、参加者に自由に会話してもらったかたちで行った。会話はテープレコーダーで録音し、後に文字起こしを行った。また、筆者は録音を開始するまでのウォーミングアップ時と、途中、参加者同士の会話が詰まったときに1分程度、場の雰囲気調節のために、会話に加わった。それ以外は参加者同士のみで自由に会話をしてもらった。

5. 結果と考察

5.1 ブレークダウンからの回復

44分のインターアクションの中で、14回のBDが観察された。そのうち、NNSがNSの発話が理解できなかったためにBDが起こったのが10例、NSがNNSの発話を理解できなかったためにBDが起こったのが4例であった。BDから回復できた例がそれぞれ、3例、0例であったのに対し、回復できなかったのが6例、2例、回復できたか判定できないものがそれぞれ1例、2例であった（表1）。

表1 ブレークダウンからの回復状況

	回復	非回復	判定なし
NNSがNSの発話を理解できなかったBD	3	6	1
NSがNNSの発話を理解できなかったBD	0	2	2

BD から回復できなければ、未知の言語形式は未知のままであり、言語習得を促進しないであろうから、言語習得を促進するのはBD から回復できた場合であると考えられる。今回の調査では、回復できた例と回復できなかった判定できなかった例を合わせると、6例である。

まず、BD から回復できた例を個別に見て考察を加える。例1は、NNSがNSの発話を理解できなかったために起こったBDである。

例1) (NSは母語話者、NNSは非母語話者を表し、数字は発話番号を表す)

NS1 : 日本に来て何年経つんです?

NNS2 : ……。 ←BD

NS3 : 日本に来てどれぐらい?

NNS4 : あ、4か

NS5 : 4か月? 4か月ならすごいね。

この例では、NS1の発話をNNSが理解できなかったため、NNS2でBDを起こしている。それに対して、NS3でNS1の発話意図を別の表現で言い換えることによって、NNS4でBDから回復している。Long (1981)が主張するように言い換えによる会話調整によって意味交渉が行われているが、これは言語習得を促進しているのだろうか。この事例においてNNSはNS1の「何年経つんですか」が理解できなかったと推測される。しかし、その言い換えのNS3の「来てどれぐらい」は知っていたため理解でき、会話が流れたと考えられる。この場合、NNSにとって未知なのはNS1の「何年経つ」であり、言語習得のターゲットである。では、NS3の言い換えによってNS1の「何年経つ」の習得が促進されるのだろうか。NNSの認知を考えると、NNSはまず未知の言語形式のインプットを受ける。それが分からないため、沈黙や明確化要求をする。それによって、NSは言い換えなど発話意図は同じで形式が異なる発話をする。NNSはこの時点で意味を理解して、内容に答え、会話は流れていく。しかし、未知の言語形式を習得しようとするれば、意味を理解した時点で、意味交渉が起こる前の最初の未知の言語形式と意味をマッピングさせなければならず、未知の言語形式を意味交渉の最中ずっと保持していなければいけない。この例のように比較的シンプルに、且つ、早く意味交渉が終わり、意味が理解できればいいが、意味交渉が長引いたり、言い換えが複雑である場合、また、未知の言語形式が音声的に長かったり、複雑である場合などは、未知の言語形式を保持し続けるのは困難であるように感じる。

この他にBDから回復できたのが例2、例3である。

例 2)

NS1 : 家でもコーヒー飲むんです？

NNS2 : ……。すみません。 ←BD

NS3 : 家でコーヒー飲みますか？

NNS4 : はい、飲みます。ベトナムのコーヒーを飲みます。

例 3)

NS1 : 休みの日は何かしてるの？

NNS2 : 休み？ ←BD

NS3 : 休みの日は何かしてるの？

NNS4 : ああ。アルバイトをしたり、テレビを見たり、……

例 2 では、NS1 の発話ができなかったので、NNS は NNS2 で「すみません」と聞き返している。その聞き返しに対して、NS は NS3 で言い換えを行っている。この例も例 1 同様に、未知の言語形式 (NS1) と言い換えによって意味を理解した時点 (NNS4) が近いと、意味を理解するまで未知の言語形式を保持し続けることは、負担は多いが可能であろう。例 3 でも、NS1 の発話に対して NS2 で「休み？」と明確化要求を行っている。しかし、NS は NS3 でも NS1 と同様の発話を行っているが、NNS4 で NNS は質問の意味を理解している。おそらく、これは NS1 の発話が聞こえなかったか、何か勘違いしてご理解をしたのであろう。

一方で、BD から回復できたか判定できなかったのが例 4 がある。

例 4)

NNS1 : NS さん、今、何をしていますか。

NS2 : 今、ええ、コーヒーの。

NNS3 : コーヒー……。 ←BD

NS4 : コーヒーショップ。……の……をやってる。

NNS5 : あー。

NS6 : 毎朝、お客さんに、コーヒーを出して。

NNS7 : あー。

NS8 : コーヒーは毎日飲んでるし、僕も好き。

例 4 では NNS1 の質問に対して、NS が NS2 で明確に答えていないために BD が起こったと考えられる。NNS3 で明確化要求を行ったため、NS4 や NS6 でより具体的な説明を行っている。だが、この場合は、BD の原因が NS の説明不足であると考えられるため、その後の意味交渉によって何かが習得されたかと言えば、そのようには考えにくい。したがって、言語形式に問題がある意味交渉が起これば、言語習得と促進する可能性があるが、この例のように、内容に関する意味交渉であれば、言語習得にはあまり貢献しない可能性もある。

次に、NS が NNS の発話を理解できなかったために起きた BD の中で回復できたか判定できなかった 2 例を見る。

例 5)

NS1 : ベトナム料理は何がおいしいですか。

NNS2 : 例えば、はフアーとかバインセオとか。

NS3 : フアー? 日本の料理はおいしいですか。 ←BD

NNS4 : 多分。同じ。

例 5 では NS の質問 NS1 に対して、NNS が NNS2 でベトナム料理について答えている。NS はその料理が分からなかったため、BD を起こし、NS3 で明確化要求をしている。しかし、同じターンにトピックを変える質問をしているので、BD から回復できたかどうか分からない。しかし、このような場合、NNS は聞き手である NS と意味交渉をしなくても、聞き手が理解していないということ示せば、NNS は自身の中間言語のどこかに問題があったのか、例えば、「フアー」という語彙は日本語では通じないかなどと考えるであろうから、アウトプットによる仮説検証として働いているように考えられる。つまり、意味交渉が起これなくても、Long (1996) が主張するように、NNS のアウトプットを NS が理解できなかったことが、仮説検証として働いている可能性はある。

例 6 も NS が NNS の発話を理解できなかったために起きた BD の例である。

例 6) (XX は、文字起こしの際、聞き取れなかった部分を表す)

NS1 : ○○先生はどんな先生ですか?

NNS2 : XX に教える……

NS3 : 上手に……

←BD

NNS4 : 時間が

NS5 : あ、期間が短いんだ。

NNS6 : はい、1 週間は 1 回は教えます。

この例では、NS が NS1 の質問の答えが聞こえなかったからか、NS3 で確認チェックのような発話をしている。しかし、NNS は NNS4 でトピックを変えてしまっているので、BD から回復できたのか判定できない。

以上、意味交渉によって BD から回復から回復した例、また回復できたか判定できなかった例を記述・考察した。事例数が少ないが、Long (1981, 1996) が主張するように、自然な会話の中にも頻繁に BD と意味交渉が起こっており、NNS が NS の発話を理解できなかったために起こった BD の際に意味交渉によって言語習得が促進される可能性が観察された。しかし、未知の言語形式を意味交渉中保持していなければいけないという負担があり、学習者自身の誤用と教師の正用を直接並べて比較できるリキャストに比べれば、言語習得の促進効果が高いとは言えないかもしれない。また、リキャストは学習者自身の誤用を含む発話がフィードバックの起点になっているため、学習者にとって習得の一步手前の言語形式であることが多いと考えられる。一方、今回の例のように NS の発話を理解できないことが起点になった BD は意味交渉を経て意味を理解したとしても、その言語形式に対して学習者のレディネスが備わっている保証はない可能性も考えられる。

5.2 会話調整

次に会話的調整に使われたストラテジーを見る。BD から回復するためには、まず、聞き手が話し手の言っていることが理解できないというサインを送り、続いて、話し手が会話的調整をする。ゆえに、理解できないというサインと会話的調整を合わせて見ていく。

例7は寿司について話している場面である。

例7)

NNS1 : わさびをつけて、おいしいです。

NS2 : おいしいです? 回ってる寿司ですか?

NNS3 : 回ってる? ←サイン1

NS4 : 回ってる寿司。 ←会話調整1

NNS5 : ……。 ←サイン2

NS6 : うーん、難しいなあ。

NNS7 : 回ってる? ←サイン3

NS8 : 回転ずし。 ←会話調整2

NNS9 : ……。

NS10 : よく行くお寿司屋さんはどこですか。

NS2でNSは食べに行く寿司屋について「回っている寿司(屋)」と質問している。続いてNNSは理解できないというサインを「回っている?」と明確化要求のように聞き返している。「回る」という語彙が分からないのか、「回る寿司」の意味が分からないのか特定できないが、NSの理解できないというサインがNSに伝わり、NSは続くNS4で「回っている寿司」とリピートしている。しかし、NNSはそれでも分からないため、NNS5で沈黙しており、そのサインが伝わったため、NS6では「(意味を説明するのは) うーん、難しいなあ」と発話していると思われる。続けて、NNS7でもう一度「回ってる」と明確化要求したので、NSはNS8で別のストラテジーとして、言い換えの「回転ずし」と発話したと考えられる。この例のように、理解できないことを伝えるサインとして、その部分をピンポイントで明確化要求のようなかたちでする方法や沈黙、そして、会話的調整のためのストラテジーには理解できなかった部分をリピートで繰り返したり、言い換えによる別の表現で説明するという方法が見られた。また、話し手の言ったこと理解できないというサインとして、他のストラテジーも使用されていた。例2のNNS2で発話された「すみません」や、魚釣りの会話をしている例8のNS3の「何を釣るんです?」、NNS4の「池」に続く、「いか?」という確認チェックなどが見られた。

例2) (再掲)

NS1 : 家でもコーヒー飲むんです?

NNS2 : ……。すみません。 ←BD

NS3 : 家でコーヒー飲みますか?

NNS4 : はい、飲みます。ベトナムのコーヒーを飲みます。

例8)

NS1 : ベトナムでも釣りするんです？

NNS2 : よく行きます。

NS3 : 何を釣るんです？

NNS4 : 池。

NS5 : いか？ ←サイン

NNS6 : 池。池で釣りに行きます。

NS7 : 池で魚？

NNS8 : 小さい魚。

また、食事について話している例9のNS1の「どれぐらい食べるんです？」という質問に対して、NNS2の「1時間」というように間違った回答をすること、つまり誤答をすることも、意図的ではないにしろ、結果的に理解できていないサインを送ることになっている。

例9)

NS1 : どれぐらい食べるんです？

NNS2 : 1時間。 ←誤答

NS3 : 1時間？ たくさん？

NNS4 : ・・・

NS5 : 何個ぐらい？ 何個ぐらい食べます？

NNS6 : 私は6ぐらい。

以上、会話的調整を見てきたが、Long (1981) が主張したとおり、会話的調整として、理解チェック、明確化要求や、リピート、言い換えが使用されており、BD から回復できたかどうかは別にして、いずれも有効に機能しているように思われる。

5.3 言語習得を促進するその他の可能性

接触場面のインターアクションを観察している際に、インターアクション仮説以外にも言語習得を促進している可能性がないか探る。

例10は、例7の「回っている寿司」の会話の前の部分である。

例10)

NS1 : 何が好きですか？

NNS2 : 寿司が大好きです。寿司に 寿司を……わさび……

NS3 : つけて。 ←先取り

NNS4 : わさびをつけて、おいしいです。

NS5 : おいしいです？ 回ってる寿司ですか？

NS が NS1 で好きな食べ物について質問をしている。NNS は、NNS2 でそれに対して、「寿

司が大好きです」と返答し、続けて「わさびをつけて食べるのが好きだ」との趣旨の発話をしようとしたと考えられる。しかし、「つける」の部分に一瞬詰まったとき、NSがNS3で「つけて」と先取りをしている。この例のように、NNSが言いたいことがあり、分からない部分の手前まで発話をし、分からない部分をNSに補ってもらおうという行為は、意味と形式・機能のマッピングが言語習得だと考える立場の理に適っているのではないだろうか。リキャストは学習者自身の誤った言語形式と他者によって提供される正用とを即座に認知比較することで意味と形式・機能のマッピングができると考えられているが、この例の先取りに関しても、NNS自身のできるどころまでの発話とNSによる補正によって、自身の言いたいことである意味と形式のマッピングができていると考えられる。また、言語化したいことがあり、それを目標言語で言語化している過程、また、どのように言語化するかわからず思考している際に、正しいインプットを受けることは、選択的注意がその部分に向いており、非常に有効であるのではないかと考えられる。ただ、NNSが言語化したいことをNSが適切に言語化しているかは不明であり、誤ったインプットを与えている可能性や、少し時間があれば自分自身で言語化できることを先に言語化してしまうことで、NNSのメタ言語的な統制処理である自動化のチャンスを奪っている可能性も否定できない。

次の例11も先取りの一部と考えられる例ではある。

例11)

NS1 : 日本のコーヒーはおいしいです?

NNS2 : おいしいですが、味は……。

NS3 : 薄い感じですか?

←先取り

NNS4 : 薄い? ベトナムのコーヒーは、味は、ちょっと

NS5 : 濃い感じですか?

←先取り

NNS6 : うーん。日本人には、飲んだら、

NS7 : 苦いですか?

←先取り

NNS8 : 飲みにくいです。

これは日本のコーヒーについて会話している場面である。NS1の「日本のコーヒーはおいしいですか?」との質問に対して、NNS2で「おいしいですが、味は……」と述部に詰まっている。それに対して、NSがNS3「薄い感じですか?」、NS5で「濃い感じですか?」、NS7で「苦いですか?」と質問のような先取りをしている。この例も先ほどの例10と同様に意味と形式・機能のマッピングが起こる可能性があると考えられる。また、「コーヒーの味は薄い/濃い/苦い」というように範列的な提示になっており、教室習得で行うパターンプラクティスのようなことが、意味のやり取りを中心にした実際のインターアクションの中でも見られる。このような例も含め、先取りの例は今回の会話の中でも頻繁に見られた。

6. おわりに

本稿ではインターアクション仮説を再検証した。その結果、Long (1981, 1996) が主張するように、インターアクション中のBDによる会話的調整が行われていた。しかし、BDから回

復するための会話的調整は認知的な面から考えると、学習者にとって認知負担が大きいため、有効な場合とそうでない場合があるかもしれないこと。NNS が言いたいことを NS が先取りすることも言語習得を促進する可能性があるかもしれないということが示唆された。しかし、本稿での調査、検証は極めて小規模なものである。今後はより大規模で精緻な調査が必要であることは言うまでもない。

参考文献

- Aston, G. (1986). Trouble Shooting in Interaction with Learners: The More the Merrier. *Applied Linguistics*, 7(2), 128-143.
- Cameron, J. and W. F. Epling. (1989). Successful Problem Solving as a function of interaction style for non-native students of English. *Applied Linguistics*, 10, 392-406.
- Gass, M. & Varonis, M. (1994). Input, interaction, and second language production. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 283-302.
- Hawkins, B. (1985). Is “an appropriate response” always so appropriate? In Gass, S. & Madden, C. (Eds.), *Input in second language acquisition*, 162-180. Rowley, MA: Newbury House.
- Long, M. (1981). Input, interaction and second-language acquisition. In H. Winitz (Ed.) , *Native language and foreign language acquisition*, 379. Annals of the New York Academy of Sciences. 259-278. New York: New York Academy of Sciences.
- Long, M. (1985). Input and second language acquisition theory. In S. M. Gass & C. G. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition*, 377-393. Rowley, MA: Newbury House.
- Long, M. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. C. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition*, 413-468. San Diego, CA: Academic Press.
- Pica, T. (1991). Classroom interaction, participation and comprehension: *Redefining relationships*. *System*, 19, 437-452.
- Pica, T., Kanagy, R. & Falodun, J. (1993). Choosing and using communication tasks for second language instruction and research. in G. Crookes & S. M. Gass (Eds.) *Tasks and Language Learning: Integrating Theory & Practice*, 9-34. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Pica, T., Young, R. & Doughty, C. (1987). The impact of interaction on comprehension. *TESOL Quarterly*, 21, 737-758.

朝日大学留学生別科